

## 塔ノ岳, 鍋割山 (丹沢) へ

岩井 淑

4月19日(水) 快晴

午前8時50分, 大倉を出発する。

今回のコースは大倉尾根を直登し塔ノ岳まで登り, 金冷シの頭まで引き返し鍋割山に登った後, 二俣へ下山し大倉まで戻ってくるというものである。

鯉のぼりが薫風に泳ぐのを横目で見ながら, 八重桜の咲く林道を大倉尾根へと向かう。右手には三ノ塔が木樹の間に間に見え隠れしている。歩き始めて20分もたつと額には汗がにじみ, Tシャツ姿となる。

観音茶屋宿泊所(水無寮)に着く頃には額から汗がしたたり落ち, 背中はビッシヨリとなるが, 快よい風が頬をなでてくれ, 周りは四方八方から鶯の恋のさえずりが聴こえてくる。観音茶屋の右には1m程の高さの赤い祠が建られ石像が祭られている。石に彫られた像は首から上がなく, 足をしっかり開いている姿は男の仁王様か不動様のように感じられるが, 女の観音様だという。ちなみに股間は平だった。

緑色の見晴小屋に着いたのは9時35分。

下からせせらぎの音がかすかに聞こえ, 白い花をつけた山桜がとても綺麗だ。見晴小屋までの道は植林された杉林の中の日影に湿った道が多かったが, 小屋を過ぎると明るい尾根へと出た。

尾根道には昭和59年11月に植樹された紅葉が赤味がかかった若葉を出し始め, 20~30年後の秋シーズンのすばらしさをほうふつさせる。両側に1, 5m間隔で数千本植られた登山道は『丹沢尾根もみじの道』と名付けられており, 現在のただらだらという登りだけで何の変哲も無く, 「馬鹿尾根」などと蔑げすまされている大倉尾根を表尾根の人気に匹敵する登山道へと変貌させることだろう。

吉沢平の駒止茶屋宿泊所へは10時05分に到着。

前面に広がる三ノ塔, 行者岳, 新大日岳から塔ノ岳へと繋がる丹沢表尾根の稜線は, 手を伸ばせば届くような近さに迫り, 相模湾は右手遥か遠くに望めるわけだがあいにく春霞の中にかすんで見ることは出来なかった。

ホオジロがさえずり, ピンクや白の散り始めた山桜が登山道に覆いかぶさり, 吹き上げてくる風が松の梢を揺すりサワサワという音が耳に快ちよい。陽当りではカマキッチョがチョロチョロと姿を見せながら遊んでいる。

平屋作りで真中に煙突の突きでた山小屋・堀山ノ家を過ぎる頃, 周りの木樹はまだ芽吹きが始まったばかりである。

やがて雲の上に真白な雪ぼうしを被った富士山が見える花立山荘にたどり着くと, 木樹はまだ芽吹くことなく春の訪れを待っている。ここら辺りの熊笹は脊も低く色あせて見える。小広い花立に立つと塔ノ岳まで25分の標示が目飛び込んで来る。もう一息だ。

金冷シの分岐を右に分け, 重くなった足を一步一步引き摺りながらようやく日ノ出山荘と尊仏山荘の建つ塔ノ岳山頂に到着した。11時50分は予定通りの時間であった。

早速、尊仏山荘に飛び込んで缶ビールを2缶買い求め昼食とする。握飯4個とイワシ、ハマグリ、缶詰2缶、キュウリの漬物とキャラブキの煮物である。ウイークデーのため登山者は少なく、天気は快晴、初夏を思わす汗ばむ気候、360度の展望、気分爽快、腹ごしらえが終わった後はそのまま13時の出発まで大の字になり昼寝。

13時より鍋割山へ向かう。ブナをはじめとする落葉広葉樹林の中を大丸、小丸などの鍋割山陵を越していくのだが、幹周り2mを越す木樹も見受けられる。

ビールを飲んだせいか非常に喉が乾くが、水筒の水は残り少ないのでがまんしながら先へ進む。

1272、5mの標示がなされ、二階建ての山荘の建つ鍋割山頂へ着いたのは13時55分だった。午後より陽は雲に覆われ、風が強くなる。松洞丸が北西にそびえているのが望める広い山頂の周りは萱でおおわれている。

3才位の女の子を連れた家族連れにカメラのシャッターを押して欲しいと頼まれる。ニコリ微笑ながらピースサインを送る女の子に思わず娘の愛の姿がダブル。可愛い子供だ。この山頂から萱の中を一気に下る。かなり急激な下りが続き、下るにつれて周りの木樹も芽吹き始める。

後沢乗越から分岐を左に分け、二俣方向へ1、9Km45分の標示を見ながら最後の水を飲む。下からはミズヒノ沢の水音が聞こえて来る。梯子を降りたり木橋を渡ったりしながら後沢乗越の沢を渡ると車の轍が残る林道へと飛びでた。

本谷からの沢を倒木を頼りに渡る頃、周りはいつものまにかすっかり黄緑色の木樹へと変わっており、セグロセキレイのかん高い鳴き声が砂防堤から落下する水音に吸込まれ深い谷川へと流れて行く。そしてまた、まだ黄緑色にならずにヒヨコのウブ毛のような軟らかい黄白色をした食べたくなるような若葉をいたるところに見受ける時、生命の誕生の季節・春を本当に実感する

二俣の勘七ノ沢を渡るとすぐに沢の左岸を登る形で小草平経由の塔ノ岳行きの登山道が標示されているが、この道は地図には表記されていなかった。この沢で車止がなされているので、山菜採りの人のだろうかスクーターとバンが1台づつ止まっている。ここから大倉までは4Kmなので約1時間というところだ。

勘七ノ沢がミズヒノ沢や本沢などのいくつかの沢を集めて四十八瀬川となる右岸に神奈川県立登山訓練所の建物が建っている。その建物と川を挟んで見下ろす林道のわきに1970年5月に建立された『山の恩人・尾関広氏之像』なる銅像が山桜の下に建っている。

胸像の碑銘によると、1895年愛知県に生まれ、19才より登山を開始し、1955年全日本山岳連盟を結成。後、会長となる。神奈川県山岳連盟会長も勤め、自然保護と遭難を防止するため登山技術の普及につとめ、県立登山訓練所の設立に努力した、というものである。

大倉まで戻り、先程歩いて来た峰々を振り返ると頂上はいずれも雲の中であった。6ヶ月ぶりに登った山の感触は疲れたけれど、その疲れは肉体のみの疲れであり、精神的には気分爽快、実にすがすがしいものであった。